【 令和4年度　杉並区立済美養護学校　経営・評価計画 ［自己評価報告書］・「学校関係者評価報告書」】　　校長　伴　比佐志

目標体系

杉並区の教育ビジョン	みんなのしあわせを創る杉並の教育
学校の教育目標	**輝く子ども　ー社会の中で生きる力と生きる喜びを育むー**
目指す学校像	○【安心と安全】 安全な環境で誰もが安心して学校生活を送れる学校　○【授業の充実】 専門性を発揮し、児童・生徒の可能性を最大限に伸ばす学校 ○【地域との連携】 保護者・地域・関係機関等と連携し、児童・生徒の個に応じた支援をする学校　○【組織力の向上】 保護者・区民から信頼される学校、チームで課題解決する学校
目指す児童・生徒像	○主体性をもち、将来、豊かな地域生活・社会生活を送ることのできる児童・生徒

学校関係者評価委員会委員（学校評議委員）

渡邉 貴裕　永田 直子　渡邊 貴宏　石場 幸雄　村 一浩　齋藤 美恵
岩崎 哲也　山本 真由美　土佐 愛　野﨑 晃子　小林 進

4	優れている
3	良い
2	もう少し
1	要改善

令和4年度　経営計画・評価計画

評価指標・評価基準

区分	重点目標	目標実現のための方策	結果と成果	教員肯定率	評価	評価	学校関係者評価委員
安心・安全	児童・生徒が安心して学校生活を過ごせる教育環境を構築する。	・日常の指導を通し、事故の起きない安全な教室環境づくりを心掛けることで、児童・生徒の安心・安全を最優先に考えた教育活動を推進する。 ・栄養士・教員・調理員等で連携し、アレルギー・形態食確認会を通して児童・生徒の実態に応じた安心・安全な給食を提供する。 ・学校・保護者・医療関係者との連携により、医療的ケアの必要な児童・生徒の安心・安全な教育環境の整備を行う。 ・多様な避難訓練・防災研修・毎月行う学級での安全指導等を実施し、教職員や児童・生徒の防災・危機管理意識を高める。 ・スクールバス乗務員との連携による児童・生徒の安全確保、乗車時間短縮に向けて運行計画を見直す。	・毎日の教職員による教室環境の整備に加え、特別教室・廊下・トイレ等、普段子どもたちが使用する区画の点検・清掃を定期的に行うことで、今年一年間、児童・生徒の安全を確保してきた。またヒヤリハット事例報告会を随時行うことで、教職員全体に解決策を共有し、日常生活に起こり得る事故を未然に防ぐことができた。 ・関係者を一同に集め、アレルギー・形態食確認会を定期的に開催し、月毎の献立メニューを確認することにより、給食事故を未然に防ぐことができた。 ・本校に通う医療的ケア児がスクールバスに乗車して登下校が行えるよう手筈を整え、都内の区立学校で初めて医ケア児の乗車許可申請を行い実施した。その結果、医ケア児がより過ごしやすい教育環境づくりを推進することができた。 ・様々なケースを想定した避難訓練を行い、その都度安全確認を行うことで、児童・生徒、及び教職員の防災意識を高めてきた。また、防災研修では警察官を講師として招き、不審者への対応について理解を深めた。 ・全児童・生徒の乗車時間60分以内を目標に掲げ、スクールバス2台増便させ、対応を進めた。結果次年度よりスクールバス9台による運航の実施が可能となった。	93%	3	3.4	・スクールバスの乗車時間減少等、学校は改善に向けてよく頑張っている。子どもの置き去り事故を防ぐために、杉並区は何か対策を講じているのか。 （回答として）降車忘れを防ぐための安全装置の搭載に関しては、教育委員会とバス会社が協議し、設置の方向で進んでいる。本校は運転手と乗務員がダブルチェックを行い、学校到着後には毎日、車内の清掃を欠かさず行っている。ただ現在は人海戦術であるため、今後は電子管理を進めていきたい。 ・次年度以降に増車されるスクールバスは、大宮中の前に停車するということになっているが、それはいつまでか。 （回答として）済美教育センターの改築工事の期間だけであり、その後は現在のようにセンターで停車できるように考えている。 ・マスクの着用に関して、3月13日以降外すことになるのか。 （回答として）本校は障害の状態や健康状態により感染症に対して敏感なケースが多い。そのため完全にマスクを外させるのではなく、活動場面や環境によってはマスクの着用が求められる。本人や親御さんの気持ちに寄り添っていきたい。
人権の尊重	生活年齢に応じた指導を行い、児童・生徒の人権を尊重した教育を推進する。	・日頃から人権尊重意識の啓発を行うとともに、体罰防止等研修や服務事故防止研修、全児童・生徒を対象にした体罰調査の実施により、全教職員の人権尊重とお互いが注意しあえる職場環境を構築する。	・全教職員に向け、年3回の体罰防止を含めた服務事故研修の実施、及び全児童・生徒を対象にした体罰調査を実施することで、人権意識の向上と実態の把握に努めた。また日頃から教員間で間違った指導に対して注意をし合える関係性を構築するために、職員朝会での人権尊重意識の啓発や、学年会で適切な指導の相互確認を行った。	91%	4	3.8	・校内を回った時に、大きな声を出したり体を使って止めたりしているの教員を見たことがある。今は感染症防止ということもあり、なかなか校内を見ることができない状況なので不安になることがある。 （回答として）本校は風通しの良い職場環境に努めている。何か心配だと思うことがあったら教員同士、互いに言い合ったり、注意し合えたりする関係づくりを大切にしている。また年に三回、人権に関する内容を盛り込んだ服務事故防止研修を行うことで、職員に不適切な指導を行わないよう啓発を行っている。 ・福祉施設は、障碍者福祉での虐待防止の取り組みを行っている。具体的には虐待防止委員会をつくったり、定期的な研修、虐待・体罰等、全職員にチェックリストを配布し、集計して見直しをしたりしている。
コロナ対策	きめ細やかな健康管理と感染予防対策を徹底する。	・検温・マスク・手洗い・ソーシャルディスタンスの徹底により、コロナ感染症の拡大防止に努めた生活様式を構築する。 ・毎日の健康観察、教室内の消毒・常時換気・給食時の黙食・検温を行い、保護者と連携して児童・生徒の健康管理に努める。 ・校舎内だけでなく、毎日の登下校で使用するスクールバス車内の感染予防対策をスクールバス乗務員と連携しながら実施する。 ・校内の感染状況の経過報告を保護者に向けて定期的に情報発信する。	・感染拡大防止対策のため、入学式や卒業式などの式典、運動会や学習発表会などの大きな行事では保護者の入場人数を一家庭2名以内に制限した。また学期毎に行う授業公開では、参観できる授業を1日1コマに限定し、参観者の密集を防いだ。 ・杉並区立学校感染症と学校運営に関するガイドラインに基づき、マスクの常時着用、身体的距離の確保、常時換気、給食時の黙食、家庭と連携した児童・生徒の健康観察を徹底した。 ・校内の感染状況を保護者に向けて定期的にメール配信することで、学校に対する安心感と各家庭での登校への判断材料を与えることができた。	100%	3	3.6	・感染症防止対策は、学校の努力だけでは防ぐことはできない。本校で感染拡大が起きなかったのは保護者の協力があってこそである。家庭でお子さんの健康状態に心配な点があれば、すぐに医療機関に相談や通院の対応をいただけた。また学校の感染状況を細かに情報発信することにより、保護者に安心感を与えることができたのではないかと考えている。
授業の充実	個別指導計画に基づいた多様なニーズに応じた授業を様々な工夫を施しながら実践する。	・保護者と連携し、児童・生徒の実態に応じた個別指導計画の作成に取り組み、適切な評価による学習指導を充実を図る。 ・個別指導計画の作成において、外部専門員との連携により、児童・生徒の実態に応じた学習目標の設定と、日々の学習の記録を根拠にした適切な評価を行う。 ・つながりのある教育活動を実現するため、趣味サークルを通した異学年交流や作業体験学習等の学部間交流を創出する。 ・ICTの使用を日常化し、主体的及び児童・生徒の実態に応じた個別最適化の授業を行うための授業を行い、その成果を教職員で共有できるシステムを構築する。	・前年度の担任が子どもの成長を見据えた個別指導計画を保護者と共に作成し、学びの連続性を意識した個別指導計画・年間指導計画を作り上げることで、次年度への引き継ぎをスムーズに行うことができた。 ・専門的知識を有する外部専門員と連携を深めることで、より児童・生徒の実態に応じた個別指導計画の作成に努めることができた。 ・他学年との交流を深めるため、今年度は年に8回の機会を設け、趣味サークル活動を行った。また、小中のつながりを意識した学習指導の実現に向け、中学部全教職員による個別対応型の体験入学、それに向けた中学部主任による小学部6年生対象のオリエンテーションの実施、作業学習体験や中学部の学習発表会を児童が鑑賞する機会の創出を行った。 ・タブレットPCやオンライン環境を活用し、視覚優位や聴覚優位の児童・生徒に対する授業を行い、実態に応じた学習を展開することができた。またその成果をICT活用事例報告会やICT教材集の作成を行うことで、ICT機器の有効活用の成果を共有し、専門性の向上を図ることができた。教育課程の年間計画の中でICT公開授業とした授業参観日を設定し、保護者に活用の実際についての理解を深めた。	83%	3	3.4	・今後は各種校内研修やOJT研修をグループ化することにより、組織的に学びに対する意識改革を推進されることを期待している。 ・教育課程検討委員会にて、年間を通して改善に向けた方策を検討し、令和6年度の確実な実施につなげる。
地域との連携	地域に開かれた学校を目指し、保護者・地域・関係諸機関と連携し、児童・生徒を支援する教育活動を推進する。	・特別支援教育のセンター校として、特別支援教育の専門性を発揮し、区内小中学校・教職員に対して必要な情報発信と情報提供を行い、それに伴い副籍交流の充実を図る。 ・地域に開かれた学校を目指し、夏祭り等の行事を通して、保護者・地域・関係諸機関との交流をより一層深める。 ・学校評議委員・PTA本部役員との連携により、保護者や地域のニーズを的確に把握し、必要な情報を随時配信する。 ・年次研修生や介護等体験生、外部視察などを積極的に受け入れることで、教育活動の充実の特別支援教育への理解の拡大に貢献する。	・特別支援教育のセンター校として、特別支援コーディネーターを中心に特別支援教育の専門性を発揮し、杉教研・杉特研において区内教職員に必要な情報発信と情報提供を行った。 ・夏祭り・ふれあいアートギャラリー・善福寺川鯉のぼり川渡し・商店街へのペナント掲出等の活動を行い、地域とのつながりを意識した活動を行った。 ・学校HPの更新や定期的な学校便りの配信だけでなく、児童・生徒の学習の様子や成果をオンラインやすぐメールを使って保護者・地域に発信した。 ・教員免許取得を目指す介護等体験生や学びを深めるために訪れる年次研修生、学生ボランティア、民生委員などを数多く受け入れ、教育現場のノーマライゼーションの推進、教員の資質向上及び学校教育の一層の充実に貢献した。	86%	3	3	・こちらが一生懸命に色々な情報を発信していても、相手がどのように受け止めているかを考えなければならない。受け手がどのように思っているのか、どのように生かされているのか、その情報は本当に役に立っているのかなど気になるときがある。 （回答として）本校の活動を保護者や地域の方に伝えるために、たくさんの情報を発信することはとても大切だと考えている。ただし、情報をただ伝えて終わりにするのではなく、その情報が子供たちの成長に還ってくることで初めて情報発信の意味がある。特別支援教育のセンター校として専門性を発揮する際、できる限りの情報を送っているが、必要のない情報を送っても誰も見てくれない。区内で発達に関する相談があったときには直接訪問し、アドバイスをしながら継続してお子さんを見ていかなくてはならない。私たち教員も杉教研などで著名な講師を招いて講演してもらうことによって、子どもに対する見方が変わることがある。 ・教育実習生が体験を通して何を持ち帰ったのかを知る必要があるのではないか。「学校はやっぱりきつい」なのか、「魅力的だけど大変」なのか、実習生の本音を聞くことで見えてくるものもある。
組織力の向上	特別支援教育の専門性の高い人材を育成し、保護者・地域から信頼される組織構築を推進する。	・ライン業務の遂行と職層に応じた職責の明確化を行い、学校課題に組織的に取り組むシステムの構築を目指す。また、担当する業務の意味や目的を明確化し、新しい施策に全教職員が積極的に参画できるような学校運営を行う。 ・意図的・計画的な専門性向上のための研修実施や、学び合いを意識した実践的なOJT研修、学部を越えた授業観察を行う。	・経営企画会議・学部会・分掌等における課題の共有と、役割の明確化を行った。また前例の踏襲だけでなく、教職員一人一人が業務の円滑化を意識した職務遂行を行い、自ら業務の精選を積極的に行った。 ・研究授業を行うにあたり、職員朝会やC4thの掲示板を使って全教職員に周知させることで、学部を越えた授業観察の交流を促した。	85%	3	3.3	・次年度組織を改編することにより、学校運営が大きく改善することが期待されている。 ・全体的に教職員の肯定率が高いのは管理職の熱意が伝わって反映されている結果である。しかし、このような調査は手段であって目的ではないことを忘れてはいけない。 ・これだけ評価されていれば問題ない。熱心に取り組んでいることが伝わってきた。
働き方改革	教職員がより一層効果的に業務に専念する環境をつくることを目的とした働き方改革を推進する	・教員の業務分担の適正化や業務軽減により、余裕をもって職務遂行できるような学校運営を行う。 ・Microsoft Formsを活用した出欠席連絡体制、シェアポイントを活用したデジタル配信システムを構築し、業務削減や費用対効果の向上の推進に努める。 ・時間講師の適切な運用やスクールサポートスタッフを有効活用することで、業務の効率化に努める。	・出退勤システムの入力により、自身の労働時間の把握とその改善に向けた努力を促した。また・定時退庁日（毎週水曜日・給与支給日・期末勤勉手当支給日・長期休業中）を設け、その日の朝会で管理職が定時に帰宅することを呼びかけることにより、帰りやすい職場の雰囲気づくりと勤務時間内での作業効率化を図ろうとする気持ちを芽生えさせ、残業時間の削減に対する意識づくりを行った。 ・Microsoft Formsを活用した出欠席連絡体制、シェアポイントを活用したデジタル配信システムを構築したことで、朝の忙しい時間の電話対応の数が減り、その日の授業の準備等、限られた時間を効率的に使えるようになった。 ・スクールサポートスタッフを積極的に活用し、教員の教材づくりや資料の印刷・準備等の時間の削減に努めた。また時間講師によって教員が一時的に教室kら離れ、自身の研修の時間に充てたり、公務分掌の業務に専念する時間を創出することができた。	80%	3	3.1	・勤務時間を減らす、仕事を減らすことが目的ではない。先生方は専門家でプロとして日々教育活動に尽力している。ただ、学校以外の時間をどれだけ豊かにし、充実させているか。そこが重要。学校以外のところに教育者の見識が高められるものがたくさんある。地域の活動やお祭りなどに参加するのはオンの時間ではなくオフの時間でやるのはいかがだろうか。 （回答として）教員はよくブラックと言われている。早く帰ることを推奨しているのではなく、効率よく業務にあたることが大切。次年度は会議無し日等を設定し、教員自身の業務にあてられるように取り組んでいく。本校は真面目な教員が多いので、若手教員を中心に、真面目過ぎて一本やりにならないようにしていきたい。